

登場人物

- 宮原 梨奈 (18)
みやはら りな

主人公。デビューを控えているアイドル。

「引きこもりアイドル」として、ライブ配信を中心に活動中。

暗いキャラで売り出しているが、本当は明るく感情豊か。

北川の大ファンで、彼女に作ってもらった曲を歌うのが夢。

北川が手作りしたキーホルダーが宝物。

- 北川 麻美 (28)
きたがわ あさみ

数々のヒット曲を手掛けた音楽プロデューサーで、多くの若者に人気。

梨奈にとって憧れの存在。

- プロデューサー (27)

梨奈のプロデューサー。

「引きこもりアイドル」というキャラの考案者であり、それに対するこだわりが強い。

北川とも繋がりがあるという。

- マネージャー (27)

梨奈のマネージャー。

仕事中の梨奈の私物の管理のほか、プロデューサーからの伝言が主な仕事。

- 姉 (21)・弟 (20)

クールな感じの姉と、軽い感じの弟。共に大学生。

弟は梨奈の熱烈なファンだが、姉は最近彼女を知ったばかり。

- 堀越 美咲 (24)
ほりこし みさき

ラジオパーソナリティ。ラジオ番組『You Are the One』でMCを務める。

相手と「本当の自分」で語り合うことを大事にしている。

- 次のページから脚本。

Scene 1 - 1

梨奈「あと1時間・・・やりたくないな・・・」

河川敷にたたずみ、憂鬱そうにつぶやく梨奈。向こうから姉弟が歩いてくる。

姉「どうしたの？」

弟「あの子・・・梨奈ちゃんに似てるなって思ってた。」

姉「梨奈ちゃんって・・・ああ、あの子か。最近あんたがはまってる。そうだ、どうせならサインとかもらってきいたら？」

弟「いや、いい。たぶん別人だよ。」

姉「なんで？」

弟「だって・・・梨奈ちゃんは外出歩いたりとかしないし。」

その言葉にはっとする梨奈。居たたまれなくなり、その場を立ち去る。

姉「行っちゃった・・・。つか、出歩いたりしないってどういうこと？外出ぐらいするでしょ？」

弟「そっか、姉ちゃんはまだ見たことないんだっけ？ちよūdいいや、あと1時間で始まるから、それ見りゃ分かるよ。梨奈ちゃんがどんなアイドルなのか・・・」

Scene 1 - 2

薄暗い部屋の中。地味な出で立ちの梨奈が、カメラに向かってけだるげに話している。

梨奈「外の皆さん、元気にしてますか？宮原梨奈です。『今日もかわいいね！』ありがとうございます。今日はどんな一日でしたか？仕事や学校など、外の世界で頑張った皆さんに、しばしの癒しの時間をお届けします。『梨奈ちゃんは何してたの？』うーん・・・ずっと家にいました。外出でもやることないので。あつ、そうだ、今日は皆さんに大事なお知らせがあるので、是非最後まで見ていってください。」

Scene 1 - 3

姉「引きこもりアイドル？」

先ほどの姉弟が、パソコンの画面を見ながら話している。

弟「そう呼ばれてるんだよ、梨奈ちゃんは。ライブ配信を中心に活動していて、チャンネル登録者もかなりいる人気者なんだ。」

姉「ライブとか、握手会とかしないの？」

弟「今のところは。そのうちデビューしたらやってもいいか

な、だって。そのためには、外の世界には応援してる人がいっぱいいるんだって、俺たちがアピールしないと。」
ここで弟は、パソコンを操作しだす。

姉「・・・何これ？お金出すの？」

弟「知らないの？スパチャってやつ。配信している相手にお金を送って、応援してますってアピールできるんだ。俺はもう2万ぐらい送った。」

姉「へえ、よくそんなにつき込めるね、デビューもしてないアイドルに・・・。」

弟「それだけ応援する価値があるってことだよ。どう、姉ちゃんも気に入った？」

姉「うーん・・・思ったんだけど、この子、なんか変じゃない？」
弟「変って、どこが？」

姉「いや、単純な疑問だけど、なんでこんなに暗いの？この子・・・」

Scene 2 - 1

配信終了後。梨奈は、マネージャーと話していた。

マネージャー「お疲れ。今日の配信もよかったよ。」

梨奈「ありがとうございます。ラジオ出演の告知もちゃんと

しましたよ。」

マネージャー「そうだ、そのことで、プロデューサーから伝言。『宮原梨奈の名を全国区に広めるチャンスだから、デビューへの足掛かりになるように、しっかり売り込んで来い』だって。」

梨奈「そう言われると緊張します。」

マネージャー「公の場に出るのは初めてだもんね。何を喋るか、今のうちに考えておいたら？これがきつかけで新しいファンも増えるかもしれないし、何より・・・あの人も聞いてもらえないかもしれないよ？」

梨奈「・・・そうですね。では、お疲れ様です。」

その場を立ち去る梨奈。

Scene 2 - 2

憂鬱そうな表情で、独り歩く梨奈。カバンに付けたキーホルダーに語りかけるように、独り言をつぶやいている。

梨奈「何やってんだろ・・・。本当は引きこもりなんかじゃないのに、買い物とかお出かけの話もしたいのに・・・。あたし、これからどうなるんだろう？いつまでこう

やっつて、嘘の自分を見せなきゃいけないのかな……？」

Scene 3 - 1

一人の女性が、自宅でラジオを聴きながら仕事をしている。

美咲「堀越美咲の、You Are the One！本日のゲストは、『引きこもりアイドル』として今話題沸騰中の、宮原梨奈ちゃんです！」

ラジオブースにて、梨奈と美咲が向かい合って座っている。

梨奈「どうも、宮原梨奈です……。」

美咲「大丈夫？もしかして、生放送だからって緊張してる？」

梨奈「気にしないでください。久しぶりに外に出たから、ちょっとドキドキしてて。あっ、でも、頑張ってるので、今日はお願ひします……。」

美咲「よろしく。それではCMの後、梨奈ちゃんの隠れた魅力に迫っていきたいと思います！」

一息つく梨奈。

美咲「ねえ、ちょっといいかな？」

梨奈「はい？」

美咲「さっき、ずいぶんテンション低かったけどさ……本

当はもつと元氣出せるんじゃない？」

梨奈「えっ……どうしてそんなこと……。」

美咲「何となく、そんな気がしてさ。いや、別に無理してまで明るく振舞わなくてもいいんだよ。とにかく、私はあなたの魅力を知りたいの。だから、取り繕ったりしないで、本当のあなたで話してほしいな。」

梨奈「(小さな声で)あたしの魅力……。本当の、あたし……」
美咲「ほら、もうすぐCM明けるよ。」

CMが終わり、収録再開。

美咲「ところで、梨奈ちゃんには将来の展望とかがあってあるの？デビューしたらこんなことがしたいとか。」

梨奈「うーん……いっぱい、歌ってみたいです。昔から歌うのが好きなので。だから時々、将来はどんな歌が歌えるのかな、って考えたりしてます。」

美咲「そっか。実はね、この番組を毎週聞いてくれてる人の中に、音楽プロデューサーをやってる人がいてね。その人が、番組のテーマソングを作ってくれることになったんだ。もしかしたら、梨奈ちゃんに歌ってほしいってオファーが来るかも？」

梨奈「へえ、楽しみです。どんな方なんですか？」

美咲「北川麻美っていう人なんだけど、知ってる？」

梨奈「北川・・・はい、知っています。今すごい人気ですよ。」

アーティストの魅力を最大限に引き出しつつ、心に響く曲を作ることでも有名な方ですよ。」

美咲「そうだけど、すごく詳しいね。・・・もしかして、聴くの？」

北川さんの曲・・・」

梨奈「はい！もう全部聴いてます！」

先ほどまでとは打って変わったように、目を輝かせながら話し始める梨奈。

梨奈「北川さんは、憧れの人なんです！いつかデビューしたら、あたしも曲を作ってもらいたいってずっと思ってた！あと、この前北川さんの手作りキーホルダーのプレゼント企画があったんですけど、あたしそれに当選して・・・」

美咲「続きは収録終わってから話そう？時間ないし・・・」

梨奈ちゃんの意外な一面が分かったところで、次の

コーナーにいきましょう。」

その頃、ラジオブースの外では、マネージャーが誰かに連絡していた。

Scene 3 - 2

収録が終わった後、カフェで梨奈と美咲が話している。

梨奈「今日は呼んでいただいてありがとうございます。たつた一度の収録で、こんなに仲良くなれるなんて。」

美咲「私の方こそ、お話できて楽しかったよ。私、梨奈ちゃんのこと浮世離れた子だって勝手に思ってたけど、全然そんなことなかった。」

梨奈「本当はあたしだって、配信でも普段みたいに明るく振る舞いたいんですけどね。でも、今回の放送、みんなにはどう思われているか不安です。」

美咲「確かに、配信のノリとは全然違ったもんね・・・。まあ、私は大丈夫だと思うけど。そうだ、番組中に話してたキーホルダー、よかったら見せてくれない？」

梨奈「はい、いいですよ。(カバンを見る)・・・あれ！？ない！どこかに落としたかも！」

美咲「えっ!？」

梨奈「どうしよう・・・。」

ここで、梨奈のスマホが鳴る。

梨奈「(画面を見て)マネージャーさんからだ。(美咲に)ちょっと待っててください。」

梨奈、少し離れたところで話し始める。

梨奈「はい、梨奈です。…えっ？呼び出し？プロデューサー
さんから？…分かりました。すぐ向かいます。」

美咲のものへ戻ってくる。

梨奈「すみません、なんか大事な話があるみたいなので、も
う行かないと。」

美咲「あつ、そうなの。よかったら、また遊ぼう。」

梨奈「はい、今日はとても楽しかったです。ありがとうございます
いました。」

急いでカフェを後にする梨奈。

Scene 4

梨奈とマネージャーが、歩きながら話している。

梨奈「プロデューサーさんが直接言いたいことって、何なん
でしょう？いつも忙しいからって、マネージャーさん
に伝言してますよね？」

マネージャー「きつと、それだけ大事なことなんだよ。」

梨奈「もしかして、デビュー決定とか？」

マネージャー「どうだろうね。…あつ、この先で待つて
るみたいだから。」

梨奈「分かりました、行ってきます。」

梨奈の向かった先では、プロデューサーが待っていた。

プロデューサー「おつ、来たか。」

梨奈「お疲れ様です。それで、お話というのは…？」

プロデューサー「ああ、今日お前が出演したラジオのことな
んだが…ずいぶんと楽しそうだったじゃ
ないか？」

梨奈「はい、とても楽しかったです。」

プロデューサー「馬鹿野郎！キャラクターを崩すんじゃない
い！余計な自己主張はしないで、いつもの
ように引きこもりらしくしてればよかった
んだ！」

梨奈「でも、本当の自分で話してほしいって…」

プロデューサー「本当の自分？そんなものにすがってばかり
でやっていけるか！この世の中で成功する
ためには、少しくらいの嘘は仕方ないんだ
よ！…とにかく、今回お前はファン全
員の期待を裏切った、そのことを自覚し
ろ！」

梨奈「全員って…」

プロデューサー「実際、苦情も来てるんだよ。『せっかくあ
の物静かさが気に入っていたのに、今日ラ

ジオを聞いて失望しました。あんな子に曲を提供する気にはなれません』・・・北川麻美からだ。」

梨奈「そんな・・・！北川さんが・・・!？」

プロデューサー「全く、あのやり手にここまで言わせるとは・・・これでデビューが遠のいたな！」

梨奈は何も言い返せず、立ちすくんでいた。

プロデューサー「・・・おい、謝罪はどうした!もう二度と

こんなことはしないと誓え！」

梨奈「・・・はい。申し訳ありませんでした・・・!」

うつむいたまま、マネージャーのもとへ戻ってくる梨奈。

マネージャー「お疲れ。どうだっ・・・」

梨奈は何も答えず、足早にその場を去っていった。

Scene 5

夜の公園。梨奈はブランコに座り、思い悩んでいた。

梨奈「あたし、どうすればいいんだろう・・・。北川さんに

また気に入ってもらうには・・・。・・・本当の自分
にすがってばかりじゃ、やっていけない、か・・・。」

膝に乗せたカバンに目を落とす。キーホルダーがあった

はずの場所には、何も無い。

梨奈「・・・そんなの、できないよ・・・!あのままやつて

たら、きつとあたしは、あたしじゃなくなる・・・。

でも、夢が叶うなら、それも仕方ないのかな・・・?・・・

ああ、もう、どうしたらいいか分かんないよ・・・!」

うつむいたまま、声を上げず泣き出す梨奈。

「・・・お嬢ちゃん?大丈夫?」

顔を上げ、声のした方に目を向けると、そこには、コン

ビニ袋を提げた一人の女性が立っていた。

女性「・・・つて、君もしかして、宮原梨奈?」

梨奈「はい、そうですが・・・あなたは?」

女性「あたしは・・・(少し言いよんどんで)ただの通りがかり。

それより・・・何かあったの?こんな夜中に独りで泣

いてるなんて。あたしでよかつたら、話聞くよ。」

梨奈「ありがとうございます。実は・・・」

梨奈は、女性に今日あったことを打ち明けた。

女性「・・・なるほどね。生放送で素を出して喋ったら、キャ

ラを壊すなって怒られた、か・・・。」

梨奈「ごめんなさい、失望させてしまったら・・・。」

女性「いやいや、全然そんなことない。『You Are the One』

だよな?あたし聞いたよ。」

梨奈「あっ、それはどうも・・・。」

女性「確かにギャップはあったけど、百点満点のトークだったじゃない。どうこう言う奴らなんか気にしないで、自信持ちなよ。」

梨奈「でも・・・何よりショックだったのは、北川麻美さんが・・・。」

女性「えっ？今何て・・・。」

梨奈「北川麻美さんが、あたしのこと見放したって・・・。」

ロデューサーさんが、そう言ってたんです。」

女性「そんな・・・まさか、それ本気にしてるんじゃないよね！？」

突然女性の顔色が変わったことに、梨奈は驚いた。

女性「・・・いや、なんでもない・・・そうだ、一つ気になる事があるんだけど、いい？」

梨奈「何ですか？」

女性「君は普段、引きこもりっていうキャラを演じてるんだ

よね。で、本当の自分が出せないことに悩んでる。ならどうして、それでも今まで続けてきたの？」

梨奈「憧れの人に・・・北川さんに認めてもらいたいからです。」

女性は黙って聞いている。

梨奈「元々、自分で北川さんの曲のカバー動画を撮って投稿

してたんです。たくさんの人に見てもらえたわけではないんですけどね。そんな時に、動画を見てあたしに声を掛けてくれたのが、今のプロデューサーさんでした。『自分は北川さんとも繋がりがあある』って言ってたので、この人なら夢が叶えられるかもと思って、アイドルを始めることになったんですが・・・。」

回想。梨奈がプロデューサーから、方針についての話を聞いている。

梨奈「『引きこもりアイドル』・・・これをやれっていうんですか？」

プロデューサー「見た目や性格による自己主張が当たり前のアイドル業界に一石を投じる、全く新しいアイドル！これはブレイク間違いないだ！」

梨奈「『人目を避けて自宅に籠もり、動画配信を主な活動とする』って・・・これ、アイドルって見えるんですか？普通、ライブとかファンとの交流とか、そういったことをするものだと思うんですが・・・。」

プロデューサー「それは、一定数のファンを獲得できてからだ。ファンの存在に背中を押され、内気な

アイドルが外の世界へ踏み出す・・・ドラマ
マがあつていいだろ？」

梨奈「でも・・・自分の性格と正反対のキャラを演じながら
やっついていくなんて・・・」

プロデューサー「心配するな。デビューを果たした暁には、
北川への楽曲提供依頼も考えている。これ
は、お前の夢が叶う絶好のチャンスなんだ。
これを逃せば次はないかもしれない・・・
やっってくれるか？」

その言葉を受け、梨奈はうなずいた。

梨奈「あそこまで言われたら、そりゃ引き受けますよ・・・
今まで、何度も辞めたいと思いましたが。でも、その度
に、自分に言い聞かせてきたんです。今更夢を諦める
なんてできない、もう少しの我慢なんだ、って・・・」

女性「本当に、それでいいの・・・？」

梨奈「えっ？」

女性「その夢って、自分を偽らないと叶えられないものなの？
本当の自分じゃ、憧れには近づけないって思うの？」

梨奈「それは・・・」

女性「あたしはそうは思わない！夢っていうのは、嘘偽りの

ない本当の自分で叶えなきゃ意味がないんだよ！本当
は君だって、このままでいいのかつて迷ってるんだ
ろ？怖がらなくてもいいんだよ。一度、本当の自分を
さらけ出してみなよ！」

梨奈「だけど、みんながどう思うか・・・」

女性「大丈夫、きっと受け入れてくれるはず！あたしが保証
する！」

梨奈「・・・あたし、決めました。今の自分がやりたいこと
を、思い切りやってみます！」

女性「うん、頑張って！応援してるから！」

梨奈「あの、話を聞いてくれて、本当にありがとうございます！
す！」

晴れやかな表情で頭を下げ、家路に着く梨奈。女性はそ
れを見送った後、神妙な面持ちで考え込んでいた。

Scene 6 - 1

河川敷を歩く梨奈。首にはカメラを提げ、ギターを背負っ
ている。

梨奈「自分で動画を撮るの、久しぶりだな・・・。ギターも
ずっと触ってなかったし。うまく弾けるかな・・・？」

しばらく周囲を歩いた後、適当な場所（ベンチか石垣）に座り、自分が映るようにカメラをセットする。それからギターを持ち、カメラを回すと、明るめのトーンで話し出す。

梨奈「皆さん、元気にしてますか？宮原梨奈です。先日出演

させていただいた『You Are the One』、聞いていただきありがとうございました？そこでも話したことなんです、あたしは、音楽プロデューサーの北川麻美さんに、ずっと前から憧れていました。今日は、そんな北川さんが手掛けた大好きな曲を、弾き語りで歌ってみたいと思います。こんなの柄じゃないって思うかもしれませんが、どうぞ聴いてください。」

話し終わると、梨奈はギターを奏で始める。

やがて歌い終わり、ほっと一息つく梨奈。すると、横から拍手が聞こえてくる。梨奈が驚いてそちらを見ると、一人の女子大生（Scene 1に登場した姉）が立っていた。

姉「カメラに気づいて！あつ、撮影してたんだ。ごめんね、邪魔して。」

梨奈「（カメラを止めながら）いえ、ちょうど終わったところなので。」

梨奈と姉は、並んで座り話し始める。

姉「宮原梨奈、だよな？歌初めて聞いたけど、うまいんだね。

まあ、アイドルだし当たり前か。」

梨奈「ありがとうございます。配信見てくれるんですか？」

姉「私っていうか、弟がね・・・これ、ミュージックビデオの撮影か何か？」

梨奈「いえ、趣味・・・みたいなものです。歌うのが好きなので、みんなに聞いてもらいたいなって思ってる。」

姉「へえ、意外。いつも部屋の中でけだるそうにしてる印象があったのに・・・。」

梨奈「・・・あんなの、本当のあたしとは遠くかけ離れてますよ。みんなの期待に応えたくて、本当にやりたいことも我慢してるだけ・・・。今だって、こんなあたしの姿を見てみんながどう思うか、正直不安なんですよね・・・。」

ふと、姉は笑みを漏らした。

梨奈「やっぱり、おかしいですよ。勝手にこんなことして・・・。」

姉「いや、そういうことだったんだ、って・・・。」

梨奈「へ？」

姉「実はさ、初めて梨奈を見た時、なんか妙な子だな、って思ったんだよね。外に出ても不自由なさそうなのに、なんで引きこもってんだらうって。でも、今の話を聞いて

納得した。引きこもりのふりをしてただけだったんだ。」

苦笑いする梨奈。

姉「でも、私は梨奈の今の姿、嫌いじゃないよ。むしろ、あんな暗い顔より、そうやって好きなように振る舞ってる方が、見てて気持ちいいし全然いいと思う。」

梨奈「そう言ってもらえるとうれしいです。」

姉「・・・そうだ、これから時間空いてる？ちよつと付き合っ

てほしいんだけど・・・」

梨奈「・・・はい？」

Scene 6 - 2

喫茶店の前にやって来た、梨奈と姉。

梨奈「ここで、弟さんがバイトしてるんですか？」

姉「そう。梨奈の姿を生で見せて、びっくりさせてやるんだ。」

店内では、大勢の客が座っている。

席に着いた二人に、弟がメニューを渡す。

弟「姉ちゃん、可愛い子連れて来んじゃん。友達？」

姉「全く・・・気づきなさいよ。いつも画面越しに応援してる子が、せっかく目の前にいるっていうのに。」

梨奈「配信、いつも見てくれてるんですね。ありがとうございます」

ざいます。」

弟「え？まさか・・・えええ！？梨奈ちゃん！？」

姉「ちよつ、声大きい・・・」

店内にいた客や店員の視線が、一斉に梨奈に向けられた。

ぱつが悪そうな表情を浮かべる梨奈。立ち上がって口を開く。

梨奈「あの・・・ごめんなさい！あたしのこと知ってる人が

何人いるかは分かりませんが、仮にも引きこもりのあ

たしがこんな所にいたら、やっぱり、変ですよね：？」

すると、客が一斉に梨奈に群がり始める。皆うれしそ

うな表情で、サインや握手をお願いしたり、「いつも配信見てるよ」と話しかけたりしている。

弟「謝る必要なんてないよ。引きこもりだのなんだのどうだっ

ていい。俺たちはただ、梨奈ちゃんが梨奈ちゃんदैいて

くれるだけで幸せなんだ。」

梨奈は、意を決して問いかけた。

梨奈「皆さん・・・こんなあたしを、受け入れてくれるんで

すか？」

周りからは次々と、「うん！」「もちろん！」などといった声がかかる。

梨奈「ありがとうございます！あたし今、アイドルやってき

た中でいちばんうれしいです！」

梨奈は、感激しながら答えた。

Scene 7 - 1

帰り道、バス停でバスを待ちながら、姉弟が話している。

弟「姉ちゃん、今日はありがとう。」

姉「何が？」

弟「梨奈ちゃんだよ。まさかあんな形で会えるなんて思っ
てなかったわ。しかも、配信の時より百倍可愛かったし。

また来ないかな。」

姉「あら、梨奈ちゃんは出歩いたりしないんじゃないかなかった
の？」

弟「(苦笑いして) いや、あれは勝手な思い込みだった。た
ぶん姉ちゃんが連れてきてくれなかったら、俺一生梨奈

ちゃんのこと誤解してたかも。」

姉「全く、大げさなんだから……。」

しばらく無言でたずむ二人。弟はスマホを見ている。

弟「……ええっ!? 嘘だろ!？」

姉「何? 突然大きな声出して。」

弟「これ……」

弟からスマホの画面を見せられた姉は、信じられない、と
いった表情を浮かべる。

姉「何これ……梨奈が……!？」

Scene 7 - 2

その頃、梨奈は満足そうに家に向かって歩いてた。

梨奈「よかった、みんなに受け入れてもらえて。今度あのお

姉さんに会ったら、お礼言わなくちゃ。」

しかし、カバンに目を落とし、少し憂鬱になる。

梨奈「……それにしても、どこいったんだろう、あたしのキー

ホルダー……。確か、収録の前、マネージャーさん

にカバンを預けた時には、まだあったんだよな……。

カフェに行く途中で落としたのかな？」

すると、スマホが鳴る。

梨奈「……プロデューサーさん？」

立ち止まり、電話に出る。

梨奈「はい、梨奈です。」

プロデューサー「おお、突然すまん。どうしても知らせな

きゃならないことがある。」

梨奈「何ですか？」

プロデューサー「実はな、あれからいろいろと考えた結果、俺も考え直したんだ。この先お前を『引きこもりアイドル』として売り出すのは、やはり無理がある。だから……」

梨奈「路線転換、つてことですか？」

プロデューサー「……引退だ。」

梨奈「……えっ？」

プロデューサー「お前が余計なことをしたせいで、どれだけイメージが壊されたか分かっているのか！もはやそれを回復するには遅すぎる。引退しか道は残されていないんだよ！」

梨奈「そんな！イメージが回復できないなら、新しい路線で売り出したっていいじゃないですか！突然引退なんて言われても……」

プロデューサー「口答えするな！もう公式に発表済みだ！おとなしく受け入れろ！」

梨奈「でも、せっかくなここのまでやってきたのに……」

プロデューサー「とにかく、もう俺やマネージャーには連絡するな。それと、お前は放っておくと何をしでかすか分からんから、最後に一つだけ言っておく。今回のやり取りについて、外

部に言いふらしてはならん。じゃあな。」

梨奈「待ってください！デビューはどうなるんですか！？それはまだ……」

梨奈が問い詰めるも、電話は切られてしまう。すぐに掛け直しても、つながらなかった。

しばらくスマホを操作してから、がっくりと肩を落とす。

梨奈「だめだ、電話は着信拒否だし、LINEもブロックされてる……」。

Scene 7 - 3

すっかり日が暮れた頃、梨奈は公園 (Scene 4と同じ場所) のベンチに座り、呆然としていた。

梨奈「あーあ……何だったんだろう、あたしが今まで自分を偽ってきたのは……。結局北川さんには会えない

まま、終わっちゃうなんて……。それに……」

カバンから財布を取り出し、ため息をつく。

梨奈「まだ、お給料も何ももらってない……」。すると、背後で聞き覚えのある声があった。振り向くと、外の道にマネージャーが背を向けて立っており、誰かに電話をしている。

聞き耳を立てる梨奈。マネージャーはニヤニヤと笑みを浮かべながら話している。

マネージャー「・・・宮原梨奈の件ですが、本当に引退させてよかったですか？・・・ああ、それから仕方ありませんね。それで、分け前はちゃんと用意しているんですよね？・・・ああよかったです。では明日の昼11時、受け取りに参ります。場所は・・・」

やがて電話を終え、梨奈には気づかず立ち去るマネージャー。梨奈はマネージャーの言っていた場所をスマホにメモする。

梨奈「さっき言っていた場所・・・あたしも行ってみよう。絶対、何かある・・・！」

対、何かある梨奈。

Scene 8 - 1

翌日の昼。梨奈は、人気がない古い建物の近くで、様子を探っていた。

梨奈「マネージャーさんのあの話し方・・・なんか嫌な感じだった。怖いけど・・・行くしかない。」

すると、プロデューサーとマネージャーが何か話しながら、建物の屋上に上っていくのが見えた。梨奈も深呼吸してから、そつと後を追う。

やがて屋上に着くと、梨奈は物陰に身を潜め、プロデューサーたちにスマホを向ける。

マネージャー「いや〜まさか、こんなにうまくいくとは！さすがですね。」

プロデューサー「だろ？北川麻美の名を出せば、大抵の若い奴は食いついてくるからな。今回は思ったより長続きしなかったが・・・代わりはいくらでもいる。それに・・・十分儲かったから、よしとするか。」

プロデューサーは、マネージャーに封筒を渡す。マネージャーはその中から、札束を出して数え始める。

マネージャー「あああつ・・・これはすごい！これまだまだ半分だなんて！」

プロデューサー「視聴者からの投げ銭がでかかったな。一人で何万もつぎ込んだ奴もいるらしい。あとは・・・広告収入とか、ラジオの出演料も。」

マネージャー「アイドルって、こんなに儲かるんですね〜。そうそう、こちらもいいものが手に入ったん

ですよ。私はいらないので、どうかお納めください。」

その直後、梨奈は声を上げそうになった。

マネージャーが取り出したのは、梨奈のカバンについていたキーホルダーだった。

プロデューサー「何だこりゃ？・・・まあ、一応もらっておくか。」

マネージャー「では、私はこれで。またちようどいい子が見つかったら、ご連絡を・・・」

梨奈「待つてください！話があります！」

梨奈は、二人のもとへ歩み寄り、まっすぐに問いかける。

梨奈「今の話、どういうことですか？どうして、勝手に引退させたんですか？全部説明してください！全部撮ったので、言い逃れはなしですからね！」

マネージャーは、慌ててその場から逃げだした。

しかし、建物を少し離れたところで、誰かに引き止められる。

一方プロデューサーは、黙って梨奈と対峙していた。

梨奈「考えてみれば、おかしかったんですね。『収入はデビューしたらまとめて渡す』なんて。デビューしてなきゃ、ただ働かさせてもいいとも思ってたんです

か？こっちは一生懸命やってきたのに、結局用済みになったら引退させて、利益は自分たちで独り占めだなんて・・・ありませんよ。」

プロデューサー「分かってないな、お前は。」

梨奈「分かってないのはどっちですか！？こんなやり方で儲けて、恥ずかしくないんですか！？」

プロデューサー「前にも言ったよな？世の中で成功するためには、多少の嘘は仕方ない。これも一つの戦略なんだよ。お前だって、俺の言う通りにおとなしく引きこもりを演じてれば、もう少しはいい思いができたのに・・・」

梨奈「あたしはただ、そうすれば北川さんに認めてもらえるって言われたから・・・」

プロデューサー「何なんだよ、北川、北川って！そんなに北川に気に入られたいか！？あんな誰にも見向きもされない歌真似しかできないくせに、偉そうな口をきくな！」

梨奈は、何も答えない。

プロデューサー「(キーホルダーを出して)確かこれ、北川からプレゼントされたんだよな？お守りのつもりだか知らないが、こんなものがある

から北川にこだわってばかりなんだ！いい
加減に現実を見ろ！」

プロデューサーは、キーホルダーを地面に叩きつけ、踏
み潰してしまった。

プロデューサー「……まあ、俺がお前にいい夢を見させて
やったんだ、ありがたく思えよな。」

梨奈「……ふざけないで……。」
プロデューサー「は？今何て……」

梨奈「ふざけないでよ！！」

呆気にとられるプロデューサーに、梨奈は心にため込ん
だ怒りをぶつける。

梨奈「あたしがどんな思いであんたに従ってきたか分か
る！？何度も本当の自分を見失いかけて、何やってん
だろうって悩んで……！それでも、絶対夢を叶えた
いっていう一心で、全部我慢して今までやってきたの
よ！それを叶うわけないって決めつけて、自分勝手な
目的のために利用してたなんて……そんなのひどす
ぎる！あたしは……あたしはあんたの思い通りにな
るだけの人形なんかじゃない！！」

息を切らしながら、まっすぐにプロデューサーを見据える
梨奈。

「梨奈！よく言った！」

ふと、背後から声がある。梨奈が振り返ると、そこには、
以前 (Scene 5) 梨奈に話しかけてきた女性が立っていた。

梨奈「あの時の、お姉さん……。」

女性は、プロデューサーのもとへ歩み寄る。

女性「あんたが、この子のプロデューサーか。ちよつと言
いたいことがあるんだけど。」

プロデューサー「おいおい、誰だか知らんが、部外者が口を
挟まないでくれるか？」

女性「部外者？あんた、あたしと繋がりがあってこの子に
言っただんでしょ？あたしもなめられたもんだね、見

ず知らずの奴の知り合いに仕立て上げられるなんて。」

プロデューサー「な……何なんだよ、お前！？」

梨奈「まさか……お姉さんが……？」

女性は名刺を取り出し、プロデューサーに突きつける。

女性「あんたに勝手に名前が使われた……北川麻美は、こ
のあたしのことだよ！！」

愕然とするプロデューサー。

プロデューサー「なんで……バれてるんだ……！？」

北川「この子が全部話してくれた。あんたに声を掛けられ、『引
きこもりアイドル』なんてのをやらされてたことも、

夢が叶うチャンスだとか言って、簡単に辞められないようにしてたことも、そして・・・あたしが見放したとかでたため吹き込んで、何も悪くないこの子を追い込んだことも！」

プロデューサー「お前・・・よくも内情をペラペラと・・・！」

梨奈「あたし、隠し事は苦手だから。(北川に)でも、どうしてここに?」

北川「(梨奈に)それは、君がここに来た理由と同じ。マネージャー名乗ってたこいつの仲間が喋ってたのを聞いたんだよ。」

北川はプロデューサーの方に向き直る。

北川「さっき、あんたの仲間が逃げ出すのを取り押さえて問い詰めたら、あっさり詐欺を認めたよ。自分の素性はひた隠しにして、周りには平気で嘘を重ねる・・・それを何とも思わないじゃ、他人の自分らしさを否定できるのも無理ないな。そんな嘘にまみれたやり方で手にしたものに、価値なんてない!他人の夢や憧れを踏みにじった罪の重さ、しっかりと思い知りな!」

北川の言葉を受けたプロデューサーは、梨奈と北川に向かって頭を下げた。

プロデューサー「騙して悪かった・・・この通りだ!」

梨奈「美咲さんや、ファンの皆さんにも、ちゃんと謝ってよ

ね・・・。」

プロデューサー「分かった・・・。」

そして、プロデューサーを連れて立ち去る直前、北川は梨奈に言った。

北川「ここで待ってて。後で、二人で話そう。」

梨奈は、黙ってうなずいた。

Scene 8 - 2

しばらくして、屋上に北川が戻ってきた。

北川「お待たせ、梨奈。」

梨奈「北川さん・・・。」

北川「今まで、ずっとつらかったよね・・・。もう、我慢しなくてもいいんだよ。」

優しく語りかける北川を見て、梨奈はこらえていた涙があふれ出した。

北川は、そんな梨奈に寄り添い、涙を拭った。

梨奈「あの・・・本当にありがとうございました!」

北川「何?突然・・・」

梨奈「この前あたしの話を聞いてくれて、今日力を貸してく

れて、何より・・・ずっと、最高の歌を作ってくれて！
北川さんがいなかったら、あたしは今日、自分の思い
を言葉にすることはできなかったと思います。それに、
あの言葉に勇気をもたらって一歩踏み出したおかげで、
こんな自分でも受け入れてくれる人がいるんだって、
やっと気づけました。」

北川「いや、あたしは何も・・・むしろ、すごいのは梨奈
の方だと思う。明るくて、感情豊かで、まっすぐなそ
の姿。それをずっと忘れずにいるなんて、そうそうで
きるんじゃないよ。」

梨奈「明るくて、感情豊かで、まっすぐ・・・。これがあた
しの魅力だって、今なら胸を張って言える気がしま
す。」

北川「・・・さて、これからどうするの？」

梨奈「何も決めてませんが・・・実はまだ、引退を受け入れ
られてないんですよね・・・。だって、まだ一つも夢
を叶えられてないし・・・、このまま終わるのは、悔
しいっていうか・・・。」

北川「ねえ、梨奈。もし嫌じゃなかったら、お願いしたいこ
とがあるんだけど・・・。」

Scene 9 - 1

1か月後。姉弟の自宅。弟が、憂鬱そうに机に突っ伏し
ている。

姉「まだショック受けてんの？もう1か月もたつのに。」

弟「そう簡単に立ち直れるかよ・・・。全てをつぎ込んでデ
ビューを後押ししてきた梨奈ちゃんが、引退って形でア
イドル人生を終えたんだぞ・・・。しかもそれが詐欺だっ
たなんて、マジ最悪！ああ・・・誰かこの心に空いた穴
を埋めてくれ・・・。」

姉「大げさな・・・。じゃあ、ライブでも行く？今日の夕方
から、私の好きなアーティストが河川敷でフリーライブ
やるんだって。」

弟「ライブ？誰の？」

姉「ふふ、あんたもよく知ってる子。待望のデビュー決定
だよ。」

Scene 9 - 2

河川敷 (Scene 1と同じ場所) で、梨奈がギターを背負い
たたずんでいる。

梨奈「もうすぐ本番・・・緊張するな・・・。」

回想 (Scene 82 の続き)。

梨奈「お願い?」

北川「梨奈はもう知ってると思うけど、あたし今、『You Are the One』のテーマソングを作ってるんだ。もしその歌が完成したら、梨奈、君に歌ってほしい。」

梨奈「えっ!? でも、本当にあたしでいいんですか?」

北川「もちろん! 素敵な魅力を持つてる君が歌ってこそ、この歌の意味があるはず。・・・いや、それだけじゃない。あたしはこれからも、梨奈が自分らしく歌ってる姿を見てみたい。梨奈をもっと輝かせる曲を作ってみたい。だから・・・梨奈の叶えたい夢を、あたしも一緒に叶えさせてほしい!」

梨奈は、驚いたような表情を浮かべる。

北川「どう?・・・やっぱり、嫌かな・・・?」

梨奈「いえ、こんなあたしにそこまで寄り添ってくれるなんて、とてもうれしいです! 北川さん、どうかよろしくお願います!」

梨奈は、北川と握手を交わした。

そんなことを思い返していた梨奈のもとへ、北川が歩いてくる。

北川「梨奈、そろそろ行こう。」

梨奈「あつ、はい。」

本番直前、ステージの脇で、梨奈と北川が話している。

梨奈「どんな歌を歌いましょうか?」

北川「何でもいいよ。好きな歌を歌って・・・あつ、そうだ。これ、あげるよ。」

そう言っつて北川が手渡したのは、梨奈が以前持っていたのと同じキーホルダー。

梨奈「これは・・・!」

北川「前のは壊されちゃったから、新しく作ったんだ・・・

あたしが必ず、梨奈の夢を叶える。その約束の証だよ。」

梨奈「ありがとうございます! 大切にします!」

北川「さあ、行っつておいで! お客さんが待つてるよ!」

キーホルダーをギターに付け、ステージに上がる梨奈。

歓声を送る観客の中には、姉弟や、美咲の姿があった。

弟「梨奈ちゃん! 会いたかったよ!」

姉「梨奈! デビューおめでとう!」

梨奈「皆さん、元気になりますか? 宮原梨奈です。この度、

ずっと憧れていた北川麻美さんに曲を書いてもらい、

デビューが決定しました!」

拍手が沸き起こる。

梨奈「長年追いかけていた夢が一つ叶いましたが、今のあたしには、新たな夢があります。それは、北川さんや、ファンの皆さんから教わった大切なことを、多くの人に伝えられるアーティストになること！自分らしく夢を叶えることは、本当に素敵なことなんだって！それでは皆さん、今日は楽しんでみてください！」

観客の歓声を浴びる梨奈の表情は、心からの笑顔だった。